

見の一致をみた。周りの人々の証言によると⁸⁾「石館さんが何回も武見さんに話をして、分業を説いたらしい。そういうことを一生懸命したので、武見さんが少しずつ変わったらしいのよね。石館さんに対する態度が、石館さんが時には下に出て、一生懸命、「それもね」というような調子でもって訥々と話をしていたらしいのです。機会をみては行って話しをしたらしい。」

4. 勇ましい高尚な生き方の背後にあるもの

古稀を迎えた父を、長男基は、「私は、親父が怖い。普通、若い頃に厳しい親父は老年に入って優しくなるものだが、私の親父にはそれがない。終戦後、際どいところで焼け残った我が家の子供部屋は、改造されて基督教の伝道所となった。親父の大学時代の先輩、小西芳之助先生がその牧師に迎えられてから二十年になるが、現在も日曜日に三十人以上の人々が集まってくる。多忙の親父も月に一回、必ずここで説教を担当する。こんな時、親父は科学者としてではなく、一人の人間として真の人間の生き方を訴える。」と述べている^{3,4)}。

おわりに

勇気ある決断、人との出逢いを大切にされた生

き方、熱き友情、使命感と責任感等多くの示唆に富む生き方を石館先生より教わった。医療連携のあるべき姿についても多くのヒントを頂いたことを感謝して稿を終えたい。

参考資料

- 1) 蝦名賢造. 石館守三伝—勇ましい高尚なる生涯, 新評論, 1997. p. 1-294
- 2) 石館守三. はまなすのこみち—私の歩んだ道—, 廣川書店, 1988. p. 1-101
- 3) 石館基. 天国の外交官小西芳之助・恵心流キリスト教, 高円寺家庭集会, 2010. p. 1-157
- 4) 森本和滋. 勇ましい高尚な生涯 石館守三博士—没後20年, 生誕115年. 薬史学雑誌. 2016; 51(1): 1-4
- 5) 小田嶋成和先生追悼集発行世話人. 和一小田嶋成和先生追悼集, 1982. p. 1-164
- 6) 吉岡正則. キノホルム薬害に終止符をうった田村善藏の研究成果; 薬学史事典. In: 日本薬史学会(編) 奥田潤, 西川隆. 薬事日報社. 2016. p. 409-411
- 7) 森本和滋, 藤原康弘, 川原章. 医薬品医療機器審査センター (PMDEC) から医薬品医療機器総合機構 (PMDA) への15年の歩み: 設立初期を振り返って. 薬史学雑誌. 2011; 46(1): 38-50
- 8) 秋葉保次, 中村健, 西川隆, 渡辺徹 (編). 医薬分業の歴史 証言で綴る日本の医薬分業史. 薬事日報社, 2012. p. 1-675
(平成28年12月六史学会合同例会)

日本の鶏病の歴史

佐藤 静夫, 佐藤 国雄

養鶏産業の変遷と鶏病: わが国の鶏卵生産は、明治維新後の需要増加を契機に始まり、大正期には、政府の奨励策もあり、採卵養鶏が発展し1925年の総飼育羽数は3,700万羽となった。明治・大正期には主に家禽コレラの流行が記録されている。また、大正末期の1923-24年頃に愛知県下から朝鮮へ移出されたひなの罹患が契機となり、ひな白痢 (Pullorum disease) の存在が知られた。昭和初期には致死率の高いニューカッスル病 (Newcastle disease: ND) アジア型が流行し、大きな被

害を受けたが、政府の鶏卵増産10ヵ年計画にに応じ、農家養鶏を中心に小規模専業養鶏 (300羽程度) も隆盛となり、1935年には総飼育羽数5,130万羽、採卵成鶏羽数 (以下、飼養羽数) 2,770万羽 (戸数300万戸) に達した。

この様に発展段階にあった採卵養鶏は、第二次大戦 (1941-1945) で壊滅的打撃を蒙り、1946年の飼養羽数は、690万羽と最低を記録した。採卵養鶏の回復期から発展期 (1950-70) には、輸入鶏の増加や経営の大規模化に伴う飼育密度の増大

等によりND、マレック病、伝染性気管支炎、伝染性コリーザ、*Mycoplasma gallisepticum*感染症など多様な感染症の侵襲に悩まされた。その後の成熟期（1971年以降）には、1990年代初頭からの*Salmonella* Enteritidis (SE)感染症の流行は、汚染鶏卵による食中毒の多発が業界を震撼させ、さらに2004年以降から続発の高病原性鳥インフルエンザの防除には官民が総力を傾注している。

一方、わが国のブロイラー養鶏は、1960年当初に始まり専用種の輸入を契機として急成長し、1985年には1億5,000万羽（戸数約7,000戸）に達し、大規模化、系列化が進んだ。1990年代には廉価な輸入鶏肉の影響で飼育羽数が減少傾向を示したが、2015年には1億3,500万羽台に回復し、飼養戸数は2,400戸にまで減少した。ブロイラーの生産阻害要因となる感染症としては、大腸菌症、壊死性腸炎、コクシジウム症などが注目され、鶏肉のサルモネラおよびカンピロバクターなど食中毒菌汚染が食品衛生上から重視されている。

ひな白痢の防除：本症はひな白痢菌（*S. Pullorum*）の感染により幼雛が白色下痢便を伴い、高い死亡率を示す急性敗血症性感染症で、保菌種鶏から介卵感染した初生ひなの流通により広域な養鶏場に損害を及ぼす。わが国では、1935年に本症の簡易診断法として全血平板凝集反応（WBT）が開発され、1940年に「家畜伝染病予防法」における法定伝染病に指定され、その後、現在まで毎年、WBTによる保菌種鶏の摘発淘汰（法令殺）による清浄化が実施されている。その結果、1940年当時の陽性率8.8%は、年次的に漸減し1975年には、0.004%（陽性羽数53羽）にまで低下し、ほぼ、種鶏群の清浄化は達成された。

ニューカッスル病（ND）の防除：本病はNDウイルスによる世界的な伝染病で、内臓強毒型（アジア型）の死亡率は90%以上とされ、わが国では1930年頃と1965–67年頃に流行し大きな被害をあたえ、1967年以降は、米国で開発されたNDのB1

生ワクチンが導入され、流行阻止が可能となった。鶏病の中でもNDの防除は最も重視されており、産卵開始期の20週齢頃までに十分な免疫を付与するため、NDワクチンは、他のワクチンとの組み合わせも含め6回もの接種が繰り返される。そのためNDワクチンは、生、不活化、油性の単味ワクチンに加えて、他のウイルス、細菌性ワクチンとの複合製品も開発されている。ワクチン接種の励行により2008年以降、発生の無いことから農水省により2012年9月4日付で、国際獣疫事務局（OIE）にND清浄化が申告された。

鶏のサルモネラ症（Salmonellosis, Paratyphoid）の防除：わが国では、幼雛における本症の発生は、1950年代から知られていたが、一般に損耗率が2、3%以下に過ぎず養鶏業界の関心は低かった。しかし、食品の安全性に対する社会的関心の高まりや食鳥検査制度の導入（1994）などを契機として、鶏肉のサルモネラ汚染対策上からブロイラーにおける*S. Infantis*等のサルモネラ感染が注目され、飼料安全法に基づく清浄な飼料の生産・供給等も含め防除対策が推進されている。一方、採卵鶏では1980年代末からの世界的なSE感染の流行により、わが国でも1996年以降SE汚染鶏卵による食中毒が急増した。その防除は採卵養鶏界の急務となり、農水省は輸入検疫の強化（1991、2006）による清浄な種鶏の導入を図り、養鶏業界における対策は、WHOの専門家会議の勧告に基づく指針（1993、1994）「養鶏施設の洗浄・消毒と隔離、ネズミ駆除、信頼性のあるサルモネラ検査とモニタリングシステムの設定、競合排除（Competitive exclusion: CE）法およびワクチンなどの応用」に準拠して推進されている。最近のサルモネラ食中毒の減少は、その成果と評価されるが、さらにHACCP方式に基づく衛生管理の向上が推奨されている。

（平成28年12月六史学会合同例会）